



山口恵美子 編著
『ウルグアイを知るための60章』

明石書店 2022年 336ページ

ISBN 978-4750352879

本誌の読者の多くはラテンアメリカへの造詣が深い方々だと思われるが、「ウルグアイ」と聞いて何を連想されるだろうか。ブエノスアイレスからブケブス社の船に乗られたことのある方であればコロニア・デル・サクラメント旧市街の美しい街並みや南米最古の劇場とされるモンテビデオのソリス劇場を、牛肉好きの方であれば薄いステーキ肉を使った「チビート」という料理やバーベキュー料理であるアサードを、国連総会でのスピーチに感銘を受けた方であればホセ・ムヒカ元大統領を、サッカー好きの方であればルイス・スアレスなどの世界的なサッカー選手を挙げられるかもしれない。しかし、紹介者を含め、自身の関心から少しでも外れるテーマについてはウルグアイのイメージがなかなか湧きにくい、という方がほとんどではないだろうか。

全60章からなる本書は、ウルグアイに関するさまざまなテーマについて、日本語で読むことのできる貴重な入門書である。「I ウルグアイ概要」の8章では牛肉、サッカー、マテ茶、ワイン、観光などといった親しみやすいテーマへの言及があり、「II 歴史」の12章では植民地期（先住民に関する話題を含む）から1960年代までの歴史が説明される。つづく「III 政治」の7章では選挙制度などの制度的側面に加えて都市ゲリラと軍政やホセ・ムヒカが、「IV 経済」の6章では林業とエネルギー政策、労使関係などが、「V 国際関係」の7章では近隣諸国や英米、アジアとの関係が取り上げられる。そして、「VI 社会」の8章では教育、社会福祉、移民、女性、宗教など、「VII 文化」の8章では食文化、文学、音楽、絵画などが紹介され、最後の「VIII 日本との関係」の4章では日系人社会や両国の外交および文化交流がまとめられる。

本書は2022年10月末時点ですでに241冊を擁している「エリア・スタディーズ」シリーズの1冊として出版されたものであるが、研究者と現地滞在経験の豊富な実務家の執筆バランスがよいことが特徴的であるように思われる。たとえば、ウルグアイは珍しい政治制度の導入経験があることでよく知られているが、第17章ではかつて存在した「コレヒアード制」が、第21章では「二重同時投票」がそれぞれ詳説されている。他方、第41章やコラム3を通じ、日本との比較の視点からウルグアイの教育制度の様相も知ることができる。

2022年10月のラカシェ・ポウ大統領来日のニュースをはじめ、何らかのきっかけでウルグアイが気になり始めている方にぜひおすすめしたい一冊である（なお、「ラカジェ」ではなく現地の発音に近い「ラカシェ」という表記が使われているのも本書の特徴である）。

菊池啓一（きくち・ひろかず／アジア経済研究所）